

小城市立岩松小学校
学校だより 第3号



岩松小だより

令和6年4月25日発行
発行者 校長 真子靖弘

地域の偉人 永橋庸雄翁

校門を潜るとすぐ右側に写真の石碑があるのをご存じでしょうか？永橋庸雄（ながはし つねお）氏の功徳を賛美する石碑です。

4/14(日)、この記念碑の前で追悼式(主催：岩松共有林財産管理組合)が開催され出席してきました。恥ずかしながら、私は、郷土の偉人である永橋庸雄氏について全く知りませんでした。岩松小学校創立百周年記念誌を元に、永橋氏のことについて少しご紹介します。



- ・明治5(1872)年北浦生まれ。
- ・第6代岩松小学校校長を経て、岩松村長となる。
- ・村長在任中の明治42(1909)年、祇園川の洪水に遭う。
- ・この大洪水で、岩松小学校の校舎約30坪(100㎡)と敷地約100坪(330㎡)が流失。
- ・洪水後、永橋氏は、水源涵養と村政財源を目的に、村民を説得し、全村民の協力を得て、北の山に植林(松、杉、桧)事業を推進。
- ・植林30～40年後、森は、校区の貴重な財源となり、昭和29年の南校舎を皮切りに、たくさんの教室の建設へとつながっていった。

敗戦後の経済復興がまだ不十分な時代に、岩松地区では、教育設備が整い、大変恵まれた環境で子どもたちは学んでいたことを知りました。

VUCAの時代を、永橋氏のように既存の価値観や考え方に束縛されることなく、豊かな発想で力強く生きていく児童を育てていきたいと思ひます。

インクルーシブ社会実現に向けて

今、日本は障害だけでなく、性別、年齢、国籍や宗教、文化などの多様性を認め合い、ともに暮らしていく社会を作ろうというインクルーシブ社会実現に向け舵を切っています。実際、体の不自由な方にとっても使いやすい多目的トイレや点字ブロックの普及等、物理的対策は進んできています。しかし、精神面(LGBT、強いこだわり等)や文化面(言語、生活習慣など)の違いを多様性と認め、理解し、受容していく点については道半ばと感じています。この点を乗り越えていくためには、様々な違いをもつ方の話を聴いたり、対話をしたりすることを通し、自分の見方・考え方を広げていくしかないと思ひます。



国連が定める「世界自閉症啓発デー(4/2)」から4/8までは「発達障害啓発週間」でした。この期間中、自閉症などの発達障害への関心を高めようと、SAGAアリーナや筑後川昇開橋等が、青色(啓発のシンボルカラー)にライトアップされたり、講演会が開催されたりしていました。

4/6(土)はアバンセで三木崇弘氏の講演会があり参加してきました。講演の中で、三木氏が学校と保護者の関係について「相手の事情を加味した上で譲り合いの交渉をし、本音ベースで話した方が本質的な支援につながる」と言われたり、県自閉症協会副会長が「まずは多くの人に自閉症について知ってほしい」と述べられたりしたことが印象に残り、今後も啓発活動を継続的に行っていききたいと強く思ひました。

ようこそ、校長室へ

昼休みに子どもたちが校長室に遊びに来てくれています。トントントンとドアをノックする音が聞こえ、「校長先生と仲良くなろうと思ひまして…」という声。自己紹介や地図記号クイズ大会、おしゃべり等、楽しい時間を過ごさせてもらっています。

